

新約聖書の最初が一見、無味乾燥にも思えるイスラエルの系図から始まっています。しかしそれは主(ヤハウェ)がイスラエル王国のダビデ王に、「あなたの家とあなたの王国は、あなたの前にとこしえまでも確かなものとなり、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ」(IIサムエル 7:16)と約束されたことの成就を意味します。

一つひとつの名を丁寧にみると、そこにはアブラハムから始まる問題に満ちた神の民の歴史、ダビデ以降の神の王国の歩みが、神によって守られ、イエス・キリストの誕生から新しい神の民と神の王国の歴史が始められるという驚くべき希望が描かれています。

キリストのうちにある者は、「死からいのちに」、「のろい」から「祝福」へと移されています。「のろい」とは労苦が無駄になり、自分の身を守ることばかりに汲々として不安に苛まれ、愛が冷めてゆく状況です(申命記 28:15-68)。

それに対し、「祝福」とは、キリストにある夢と希望に満たされ、「私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは、自分たちの労苦が主にあって無駄でないことを知っているのですから」(Iコリント 15:58)と断言できる世界です。

それこそが、申命記 27-30 章の結論として語るべきことばでした。

教会ではクリスマスのたびこイザヤ 11 章が朗読されます。そこでは「エッセイの根株から新芽が生え…その上に、主(ヤハウェ)の霊が留まる」から始まり、「正義」と「公正」をもって世界を治める新しい王の登場が告げられます(1,2,4 節)。

そして、その方が創造して下さる世界の姿が、狼が子羊とともに住み、ライオンと小さい子供がともに遊び、乳飲み子がコブラの穴の上で戯れることができるような神の平和(シャローム)が満ちた世界として描かれます(6,8 節)。

そして、神の御子は、その約束を成就するために人となってくださいました。その神のシャロームは必ず完成へと導かれます。それこそ私たちの夢と希望です。信仰とは、どんな暗闇の中でも、その約束に信頼し続けることです。

1. 新しい創世記としてのキリストの系図

この福音書の最初はギリシャ語で、「ヒブロス・ゲネセオス」Book of Genesis(創世記)と記されています(新改訳「系図」)。これは、「起源の記録」という意味です。つまり、キリストの起源を語ることは、神による新しい創造を語ることなのです。

「聖書」とは厳密には「契約の書」と呼ぶべきで、旧約聖書が Book of Genesis(創世記)から始まるように、新約聖書も Book of Genesis から始まります。聖書はアブラハムからイエス・キリストに至る神の契約の物語です。

原文では、「系図、イエス・キリストの、ダビデの息子、アブラハムの息子の」という順番で続きます。キリストとは、「救い主」という以前に、厳密には「油注がれた者」(ヘブル語はメシア)で、それはダビデの家系を受け継ぐ「王」という意味があります。ですから、この方は当時、何よりも、「ダビデの子」と呼ばれるのが当然でした。

そして、原文では、「ダビデの子」ということばの後に「アブラハムの子」と記されています。神と罪人との間の契約はアブラハムから始まるので、「アブラハムは、私たちすべての者の父です」(ローマ 4:16)と記され、私たちも「アブラハムの子」とされています。

私は長い間、ここには血筋による系図が記されていると誤解していました。しかし、イエスとは何の血のつながり

もないヨセフに至る系図が記されているのですから、そうではありません。ヨセフは契約によってイエスの父とされました。養子縁組で親子関係が作られたようなものです。

実際、最近の英語訳では、「Abraham was the father of Isaac, and Isaac the father of Jacob . . .」と、「beget(生む)」の代わりに、「父となる」という表現を使うようになっています。

しかも、個別に見ると明らかですが、この系図には、大きな時代上のギャップがあります。アブラハムからダビデに至る世代を十四代でまとめるのは当時、既に一般的でした。それはダビデという名前を數字化したものとも言われます。イエスは契約の上で、「ダビデの子」であり、また「アブラハムの子」なのです。

2 節から始まる具体的な名ですが、アブラハムは「信仰の父」と呼ばれます。アブラハムには子孫が約束の地を占領するという約束と、その子孫が天の星のように増えるという約束が与えられましたが、聖書の物語の核心とは、アブラハムに対する主(ヤハウェ)の契約が成就するというものです。

ただし、アブラハムは家長としては大きな欠点を持っていました。その父性の問題がイサク、ヤコブへと受け継がれ増幅されます。ヤコブはラケルの息子ヨセフを偏愛し、子供たちの間に争いを作りますが、神は、兄たちによって奴隷に売られたヨセフを用いて、ヤコブ一族をエジプトで増えさせる計画を進めてくださいました。このプロセスで「ユダ」が家族をまとめるために大きな貢献をします。

ダビデはヤコブの第四男の「ユダ」の子孫です。ユダの子を産んだ「タマル」(3 節)は、本来は息子の妻でした。ユダは、彼女を迎えた息子たちが次々死んだので「やもめ」のまま残そうとします。それに対し彼女は遊女の姿をして義父のユダを欺き、子を設けました。それは本来、死罪にあたる罪です(レビ 20:12)。しかし、神はタマルの信仰を見られ、その子を祝福してくださいました。そのことが「ユダがタマルによってペレツとゼラフを生み」と記されます。

その後の系図では、多くの人々の名が省かれた後、「サルマがラハブによってボアズを生み」(5 節)と記されますが、「ラハブ」はヨシュアがエリコ攻撃の前に遣わしたスパイを命がけで逃したエリコの遊女です。

そして続く、「ボアズがルツによってオベデを生み」(5 節)の経緯はルツ記に描かれています。「ルツ」は、のろわれた民の代名詞のような「モアブ」の女でした(申命記 23:2)。しかし神は、姑のナオミに従ったルツの信仰を喜ばれ、ボアズの嫁にしました。

その結婚からオベデが生まれ、「オベデがエッサイを生み、エッサイがダビデ王を生んだ」という感動的な記述になります(5, 6 節)。

そればかりか、「ダビデがウリヤの妻によってソロモンを生み」(6 節)とは、ダビデと「ウリヤの妻」バテシェバとの不倫関係を敢えて強調した表現です。しかも、ウリヤは誠実な人でした。

しかし、神は、この「のろわれた関係」さえも「祝福」に変え、その関係から生まれたソロモンに最高の知恵と力、富と名誉とを与えられました。

この四人の女性に共通するのは、「のろい」が「祝福」に変えられたということです。血筋の上では「のろい」でしたが、彼女たちはアブラハム契約の中に身を寄せてきた結果、「祝福の基」と変えられたのです。

キリストが「のろい」を「祝福」に変える「救い主」であるということが、彼女たちの名を通して明らかに示されているのです。

2. 神がダビデと結んだ契約

ダビデの子ソロモンから「バビロン捕囚(原文:移住)のころのエコンヤ(エホヤキン)」(11 節)までは、20 人の王が立っていましたが、14 名だけが記されます。ただここに名を連ねている王たちも問題に満ちています。

ソロモンの子の「レハブアム」(7 節)は傲慢さのために国を分裂させました。「アサ」(8 節)は敬虔な王で、その子「ヨシヤファテ」も敬虔でしたが北王国の悪王アハブ家と同盟を結び、その息子「ヨラム」はアハブの娘アタルヤを妻に迎えます。これによって北王国の偶像礼拝が南王国に入り込みます。

その後に名が省かれている三人の王はみな殺害されています。

「ウジヤ」「ヨタム」(9 節)は敬虔な王でしたが、その子「アハズ」はエルサレム神殿に異教の神への祭壇を建てた悪王です。

一方、その子の「ヒゼキヤ」(10 節)と、そのひ孫の「ヨシヤ」はダビデに並び称されるほどの傑出した王ですが、その間の「マナセ」と「アモン」は最悪です。預言者イザヤはマナセによって鋸引きの刑で惨殺され、その子のアモンは宮殿の中で家来に殺されるほどに無能でした。

マタイは敢えてこれらの救いがたい王の名も記しています。それは、神の救いのご計画は、愚かで、不敬虔な王の存在にも関わらず、進んで行ったということを証しするためです。

「エコンヤ」(11 節)はバビロン帝国にすぐに降伏したため捕囚の地で優遇され、ダビデの子孫を残すことができます。

ここでの「捕囚のころ」とは、「移住」と訳す方が適切なことばです。それは目に見える王国は滅びても、ダビデ王家は存続していたことを明らかにするためです。

それは主がダビデに、「あなたの家とあなたの王国は、あなたの前にとこしえまでも確かなものとなり、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ」と約束されたとおりです(IIサムエル7:16)。

神はかつてモーセを通して「いのちと死、祝福とのろいをあなたの前に置く、あなたはいのちを選びなさい」(申命記 30:19)と語りましたが、ダビデの後継者の何人も王が、「のろい」を選び取ってしまいました。その結果がバビロン捕囚であり、それは申命記 28 章 47 節以降において繁栄の中での落とし穴として警告されていました。

しかし、神の計画は、民の不従順によって無に帰すことはありません。

そのことを神は、預言者エレミヤを通して、今まさにバビロンによって廃墟にされようとするエルサレムに対し、「もしもあなたがたが、昼と結んだわたしの契約と、夜と結んだわたしの契約とを破ることができ、昼と夜が、定まった時に来ないようにすることができるのであれば、わたしのしもべダビデと結んだわたしの契約も…破られる。天の万象が数えきれず、海の砂は量れない。そのようにわたしは…ダビデの子孫とレビ人とを増やす」(33:20-22)と約束してくださいました。

ダビデに対する神の約束の確かさは、この天と地の規則的な動きが、神とノアの契約が守られ通している結果であることから明らかだといえます。

なお、「バビロン捕囚(移住)の後、エコンヤがシエアルティエルを生み」(12 節)と記されますが、このエコンヤという名を捕囚前と後で二回数えないと 17 節の「十四代」が成り立ちません。しかも、その後の系図に関しては分からないことばかりですが、ダビデの系図が続いたことは確かです。

そして 16 節は原文の語順では、「ヤコブがヨセフを生んだ、彼はマリアの夫であり、彼女からイエスが生まれた、その方はキリストと呼ばれている」と記されています。ここでは、ヨセフがダビデ契約の後継者であることがこの系図

全体の結論として描かれています。

それとともに、彼の立場が敢えて「**マリアの夫**」として紹介され、「**マリアからキリスト(救い主)と呼ばれるイエスが生まれた**」と描かれます。

その上で、17 節では、この系図が三つの期間に分けられます。第一期は「**アブラハムからダビデ**」に至る系図で、ここには苦しみを通しての祝福が描かれます。

第二期はソロモンからエコンヤに至る系図で、**バビロン捕囚**に至る破滅に向かう時期が描かれます。

そして、第三期こそが、**エコンヤ**以降の外国の支配に服しながら救い主を待ち望むどん底の時期です。それぞれが十四代として描かれており、これらを合わせると、七代が六回繰り返されていることが分かります。

つまり、キリストは第七回目の新しい世代、歴史の完成の時代の幕開けとして位置づけられます。

18 節での、「**イエス・キリストの誕生の次第は…**」ということばは、原文で 1 節と同じように、「**キリストの起源 “Christ’s Genesis”**」と記されています。これは誕生の様子を報告する記事ではなく、預言の成就、つまり神の救いの計画が実現したことを描こうとしたものだからです。

そのために、ここではマリアの人柄も信仰も何も述べられることがなく、彼女がヨセフとの結婚を約束した女性であったことだけが記されます。ヨセフが「**ダビデの子**」だからです。

多くの人々がとまどうこの系図こそ、神がご自身の約束を守り通してくださったということの証しです。そこでは、「**のろい**」が「**祝福**」に変えられ、預言が一つひとつが成就しています。これを味わうとき、神が私たちの人生を確実に守り通して下さることがわかり、主の前に誠実を尽くす勇気をいただくことができます。

私たちの誠実さとは、神の真実への応答です。事実、人に裏切られても、誠実を全うする者の人生は美しく輝き、そこに「**喜び**」が生まれます。

3. 「この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです」

18 節でのイエスの誕生の次第では、ごく簡潔に、「**その母マリアはヨセフと婚約していたが、二人がまだ一緒にならないうちに、聖霊によって身ごもっていることがわかった**」とのみ記されます。

厳密には原文で、「**聖霊によるものを腹に宿していることがわかった**」と記されていますが、「**聖霊による子**」であることはマリアにはわかっているにもかかわらず、ヨセフにはわかりません。

そこで、「**夫のヨセフは正しい人で**」(19 節)と描かれますが、それは義人の彼にとっては、自分との関係以外の人の子を宿しているような女性との結婚は考えられないということを意味します。

当時の正当な手続きとしては、彼女の浮気を祭司に訴え出るはずで、律法によればそのような女性は石打ちの刑に処せられることになっていました。しかし、当時の一般的な慣習としてはふしだらな女として村八分にされることで収まっていたようです。

ただし、ヨセフは、そのように「**マリアをさらしものにしたくなかった**ので、ひそかに離縁しようと思った(切望した)」と描かれます。それは、彼女が今後もどうにかして生きて行かれることを真剣に「望んだ」という意味だと思われます。

ところが、「**彼がこのことを思い巡らしていたところ、見よ、主の使いが夢に現れた**」(20 節)と描かれます。

御使いの最初の呼びかけは、「**ダビデの子ヨセフよ**」です。当時の習慣では父の名を用いて「**ヤコブの子ヨセフ**」と呼ぶのが普通でした。しかし、一介の大工に過ぎないヨセフを、「**ダビデの子**」と呼んだのです。これは途方もな

い驚きです。

しかも、御使いは、「恐れずにマリアをあなたの妻として迎えなさい。その胎に宿っている子は聖霊によるのです」と言います。つまり、マリアの胎に子が宿ったのは、神が人智の超えた救いのみわざを実行に移されたからなのです。

そして、「マリアは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい」(21 節)と言われますが、その子が生まれる前から、神からの名が与えられるというのは、神の特別の選びの器であることの証明です。

なお「イエス」という名は、ヘブル語読みによると「ヨシュア」、モーセの後継者として、イスラエルの民を約束の地に導いた指導者です。

その際、主の使いはヨセフに、「この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです」と言いました。「罪からの救い」は、抽象的な概念ではなく、イスラエルをバビロン捕囚の「のろい」から解放するということを意味しました。

それは神が再びイスラエルの民の真ん中に住み、彼らを飢えや渇き、周辺の国々の攻撃から守り、あらゆる祝福に満ちた平和な国を作ってくださいという約束です。

しかも、それは、イスラエルの民ばかりか、全世界に及ぶ救いでした。そのことがイザヤ 11 章において、神の平和(シャローム)が全地に満ちることとして描かれていました。

私たちにとっての「罪からの救い」とは、アダムの子孫によって「土地」が「のろわれ」、労働が苦しみになったことから解放され、すべての働きを主からの「使命」と受け止め、そこに「労苦が無駄にならない」という希望に満ちた喜びが生まれることです。

それは、「新しい天と新しい地」の「いのち」が今から始まっていることです。

4. 「その名はインマヌエルと呼ばれる」

「このすべての出来事は、主が預言者を通して語られたことが成就するためであった」(22 節)と記されますが、そのようにイエス・キリストによる「救い」は、イスラエルの民に与えられた預言の成就として見る必要があります。

その預言のことはイザヤ書 7 章 14 節の「見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる」でした。これは、エルサレムの王アハズが人間的な解決を求め、神がイザヤを通して招いたことばを退けたときに与えられたもので、神の救いは、人間の期待や想像をはるかに超えていることを示しています。

ただ、それは、信仰を生み出す「しるし」ではありません。「みごもっている」女性を、誰が「処女」と見られるでしょう。

しかも、イザヤ 7 章 15-17 節で語られたことは「インマヌエル」と呼ばれる方の誕生の遅れを、また、当面の大きな悲惨を予告する意味がありました。自分の知恵や力に頼る人は、救い主を求めることができませんので、神は悲惨や苦しみを敢えて与え、その傲慢を砕かれます。

つまり、「インマヌエル」の意味は、困窮と不安と敗北の中で理解できるものです。実際、イザヤ 8 章 8 節では、アッシリア帝国の攻撃がユダ王国を呑み込みそうになるところで初めて、「その広げた翼は、インマヌエルよ、あなたの地をおおい尽くす」と記され、また、8 章 10 節では、ユダ王国を攻める国々の「はかりごと・・・は破られる」ことの原因が、「神が私たちとともにおられる(インマヌエル)からだ」と記されます。

つまり、インマヌエル預言の核心とは、神の救いは人の期待をはるかに越えた形で実現するという意味なのです。

イザヤ書ではその後、「あなたの神が王となる」(52:7)と、神のご支配が明らかにされる時が来ると言われながら、その道が、「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った」(53:4)という苦難のしもべの姿として描かれます。

そしてその方は、十字架にかけられ、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれました。イエスは十字架で七つのことばを発せられましたが、マタイの福音書では人を困惑させるこの不思議なことばしか記録しません。それは、「神は今、ともにおられない…」という意味の叫びに他なりません。

しかし、神は三日目にイエスを死者の中からよみがえられました。つまり、「神がともにおられる」という確信は、「神がともにおられない…」と思われるような苦しみとあざけりに耐えることを通してこそ、理解されるという霊的事実だということです。

幸い、インマヌエル預言はイエスの父となるヨセフにとっては信仰を生み出すことばになりました。そのことが、「ヨセフは眠りから覚めると主の使いが命じられたとおりにした」と描かれます。

ヨセフはこれから自分の人生がどうなるかをわからないままに、神の真実に対して真実に応答しました。まさに、無名の大工ヨセフの態度は、イザヤの預言を聞いた誇り高き王アハズ王とは対照的だったのです。

バビロン捕囚前の王たちは、神に信頼することに失敗し、国を滅亡に追いやりました。しかし、捕囚を経た「ダビデの子ヨセフ」は、神の計画を実現する器になったのです。彼は、御使いが自分を「ダビデの子」と呼んでくれた語りかけに信頼することができました。

それは、ヨセフが日々の生活に苦しみながら、徹底的に自分の弱さを知ると同時に、神の救いのご計画に心を開いていたからです。

かつてイスラエルの民はヨシュアに導かれてヨルダン川を渡り、約束の地を占領しましたが、そこにはいつも全能の主がともにおられました。

私たちは今、新しいヨシュアであるイエスを先頭に世界へと派遣されます。その際、富や力によってではなく、神の愛の力によってこの地に神の平和を広げるようにと召されています。

「靴屋のマルティン」というトルストイの小説の原題は「愛のある所に神もある」です。それこそインマヌエルの意味になります。マルティンは、「早く死にたい」という絶望の中で、生きる使命に目覚めました。それは「死からいのちに移っています」(ヨハネ 5:24)という「心の復活」の体験です。そして、彼の愛はそれを受けた人にも「心の復活」をもたらすことができました。

「神が私たちとともにおられる」という現実とは、この世的な成功の中にはなく、苦しみの中での互いの愛の中に現れます。「罪からの救い」とは、恐怖や憎しみの連鎖が、愛の連鎖に変えられること自体を指します。

神の御子は、「ダビデの子ヨセフ」の家に、処女マリアを通して赤ちゃんになることを通して、不思議な神の愛のご支配を始めてくださいました

神の栄光は、この世の富や力よりも、愛の交わりに中に現されたのです。